神の国はいつ来るのか

ルカ福音書17:20-27

17:20 さて、神の国はいつ来るのか、とパリサイ人たちに尋ねられたとき、イエスは答えて言われた。「神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。
17:21 『そら、ここにある』とか、『あそこにある』とか言えるようなものではありません。いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。」
17:22 イエスは弟子たちに言われた。「人の子の日を一日でも見たいと願っても、見られない時が来ます。
17:23 人々が『こちらだ』とか、『あちらだ』とか言っても行ってはなりません。あとを追いかけてはなりません。
17:24 いなずまが、ひらめいて、天の端から天の端へと輝くように、人の子は、人の子の日には、ちょうどそのようであるからです。
17:25 しかし、人の子はまず、多くの苦しみを受け、この時代に捨てられなければなりません。
17:26 人の子の日に起こることは、ちょうど、ノアの日に起こったことと同様です。
17:27 ノアが箱舟に入るその日まで、人々は、食べたり、飲んだり、めとったり、とついだりしていたが、洪水が来て、すべての人を滅ぼしてしまいました。

【祈りながら考えよう】

（１）「神の国は、あなたがたのただ中にある」とはどういう意味ですか。
（２）弟子たちには再臨の時に起こる神の国の第二段階を話されました。どのように起こるのですか。
（３）人の子が苦難を受けて、この世に捨てられなければならないのはなぜですか。

【解　説】

（１）神の国は、あなたがたのただ中にある

さて、神の国はいつ来るのか、とパリサイ人たちに尋ねられたとき、イエスは答えて言われた。「神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。『そら、ここにある』とか、『あそこにある』とか言えるようなものではありません。いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。」(20-21節)

《パリサイ人たち》が神の国についてまじめな気持ちで質問したのか、それとも単にあざけっていただけなのかを判断するのはむずかしい。ただし、ユダヤ人である彼らが、神の国が大いなる力と栄光を伴って到来するという希望を抱いていた。彼らは目に見えるしるしと劇的な政変を期待していた。

救い主は彼らに、《神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません》と言われた。つまり、少なくともその時点においては、神の国は人目につくようなかたちで到来してはいなかった。それは、ここにあるとか、あそこにあるとか指摘できるようなものではない。目に見えるもの、この世のもの、時間的な制約のあるものではないのである。それどころか、救い主が言われたとおり、《神の国》は彼らの《ただ中／within you》にあったのである。

主イエスは、御国がパリサイ人の心の内にあると言われたのではない。このかたくなな偽善者たちの心には、キリストを王として迎える余地などなかった。主は、《神の国》が彼らの（ただ中に）あると言われた。

主はイスラエルの正当な王であられた。そして、すでに様々な奇跡を行っておられ、ご自分が王として適格であることを、すべての人の目に見えるかたちで証明された。

しかし、パリサイ人たちには主を受け入れたいという願いはなかった。それゆえ、神の国が彼らの前に現れていたにもかかわらず、彼らは全く気づかなかった。

（２）主に再臨の時に起こる神の国

イエスは弟子たちに言われた。「人の子の日を一日でも見たいと願っても、見られない時が来ます。(22節)

主は、パリサイ人たちに対しては、神の国はすでに来ていると言われたが、《弟子たち》に対しては、神の国を（主の再臨の時に起こる）未来の出来事について説明された。

主は、弟子たちに《人の子の日を１日でも見たいと願っても、見られない時》がやがて来る」と言われた。弟子たちは、主が自分たちとともにこの地上におられたために、主との幸いな交わりを楽しむことのできた頃の《１日》を切望するのである。主とともに過ごした日々、それはある意味で、主が力とすばらしい栄光を帯びて戻って来られる時を前もって体験できた日々だったのである。

（３）だれにでも見えるかたちで起こる

人々が『こちらだ』とか、『あちらだ』とか言っても行ってはなりません。あとを追いかけてはなりません。いなずまが、ひらめいて、天の端から天の端へと輝くように、人の子は、人の子の日には、ちょうどそのようであるからです。(23-24節)

多くのにせキリストが現れ、支配者たちは「メシヤはすでに来られた」と告げるようになる。主に従う者たちはこのような偽りの声にだまされてはならない。

キリストの再臨は、《いなずま》が空の端から端へひらめく《ように》、だれにでも見える間違えようのないかたちで起こる。

（４）人の子はまず、多くの苦しみを受け、この時代に捨てられる

しかし、人の子はまず、多くの苦しみを受け、この時代に捨てられなければなりません。(25節)

主イエスは、これらのことが起こる前に、ご自身が《多くの苦しみを受け、この時代に捨てられなければ》ならない、と再び弟子たちに告げられた。

キリストが再臨され、神の国が実現する前に、（重大な事）がここにある。弟子たちにとっては、あるいは当時のユダヤ人は、このままこの事態が好転して、神の国がここに実現していく、というふうに期待していた。

だからイエスがキリストなら、このお方によって自分たちはこのままで救われ、この世のあらゆる束縛から解放され、ここに神の国は実現し、自分たちは神の国の栄光にあずかることができる、と考えていた。

しかし、キリストがもたらす神の国は、キリストが受難のキリストとして、死ぬキリストとして、必ず十字架の死を通らなければならない。このキリストの十字架の死を通らずに神の国は決して来ない。

キリストはこの世から捨てられ、さんざんののしられて、足げにされて、ひっぱたかれて、ありとあらゆるさげすみを受けて、十字架につけられて殺される。

この出来事は、人間を神からへだてている罪の解決の出来事である。この聖き神の御子が人間の罪を負って、人間が受けるべき刑罰を自分が代わって死ぬということなしに、どうしてこの罪人なる人間に神の国が望めようか。決して望めない。神の国どころか、来たるべきものは恐るべきゲヘナの火である。

キリストがおいでになったのは、この人間の呪われた罪を全部取り除くためである。そしてゲヘナの代わりに神の国を与えるためである。キリストの十字架の贖いなしには神の国は絶対ありえない。

この世がいくら進展しても、決してこの世が理想的な神の国にはならない。世界中の人が力を合わせて、この世を理想的な神の国のような世界にしようとしても、決してこの世はそのような方向へは行かない。

キリストの十字架を通らないで、神の国は決してあり得ない。キリストを信じ受け入れて、新しく受け取ったこの永遠の神の命において、神から賜る命において受け継がれる世界、それが神の国である。

（５）ノアの日に起こったことと同様

人の子の日に起こることは、ちょうど、ノアの日に起こったことと同様です。ノアが箱舟に入るその日まで、人々は、食べたり、飲んだり、めとったり、とついだりしていたが、洪水が来て、すべての人を滅ぼしてしまいました。(26-27節)

キリストが再臨される時も、まさにこのようだと語られた。すなわち不意の出来事だということである。主の教えによると、その輝かしい出来事が起こる直前の時代は、《ノア》の時代のようになる。《人々は、食べたり、飲んだり、めとったり、とついだりしていた》。

これらのこと自体は別に悪いことではなく、人間として当然行うことである。悪いのは、人間がこれらの活動のために生きていたことであり、神に思いを向けたり、神のために時間を使おうとしなかったことである。

《ノア》とその家族が《箱舟》に入った後、《洪水が来て》、地上の住民をすべて《滅ぼして》しまった。それゆえ、キリストの再臨は、主のあわれみに満ちた招きを拒んだ者たちに対するさばきを意味することになる。

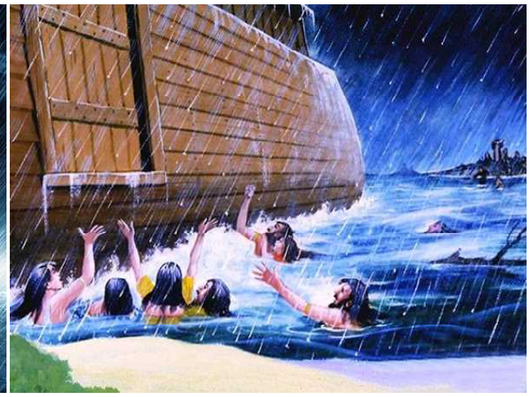
私たちがそのような世の終わりに、この世から救われる道はただ１つである。ノアは箱舟に入った、この箱舟が彼の救いであった。この箱舟を作るということはノアの信仰であった。

ノアに信仰がなかったら箱舟はできなかった。神がたとえお示しになっても、そんな事はかつてなかったし、大雨が降るなんてとても考えられないと言って、神の言葉を信じるよりも自分の常識を信じたら、ノアもまた洪水で滅ぼされることにおいて例外ではなかったはずである。

ノアを救ったのはノアの信仰であった。その信仰がお言葉通り箱舟を作らせ、そして箱舟に入った。世の人は、気違いもそこまでいけばいいとこだと笑った。箱舟のまわりを取り囲んであらゆる悪態をついた。しかしそれらの世の声をノアとノアの家族は背に受けて箱舟に入っていった。そして後ろの戸をしっかり閉めた。そこでこの世とノアたちとは箱舟ではっきりと断絶された。

信仰、それはこの世とははっきり縁を切ることである。キリストを信じるとは、私たちのために死んで下さったキリストを信じるのである。

ノアが箱舟に入った時、この世とはっきり縁を切った。この世に対してノアは死んだと同じである。「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです」（ガラテヤ6:1）。



アララテ山付近で発見されたノアの方舟（箱船）の遺跡は本物なのか？
（ロス・パターソン）
by true-ark ・ 2016-09-08

ノアの箱舟の遺跡

古代の記録

ノアの方舟の遺跡は、実際に見つかっているのだろうか？

1世紀のユダヤ人の有名な歴史家、フラウィウス・ヨセフスは，彼の著書の中で、箱船の遺跡の存在について言及している。それによると、当時はまだ箱船の遺跡が残っており、タールで覆われた材木のかけらを記念に持ち帰った人もいたのだと言う。

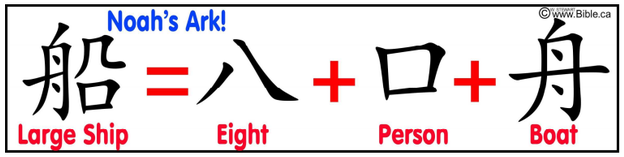
また、西暦前3世紀のバビロニアの年代記筆者ベロッソスも、箱船の遺跡が存在していたことに関する記録を残している。

ノアの箱船の遺跡～現代の証拠

現代に確認されているノアの箱船の遺跡については、こちらの動画（ロス・パターソン講演）で詳しく説明されている。

https://www.youtube.com/watch?v=8Y2ZlrTgHZo

こちらの動画の内容を踏まえて、現代の箱船の遺跡に関する内容の要点を、以下にまとめてみる。



箱船発見の経緯

ノアの箱船が停まったとされるアララテ山は、1840年の噴火によって付近一体が壊滅状態となったが、1959年に、アララテ山に隣接する谷の向こうに箱船らしき建造物が発見され、1960年に米国から調査団が派遣された時は、証拠不十分として調査が打ち切られたが、その後ロン・ワイアット氏が24回に渡って調査を行った後、それが箱船であることを裏付ける様々な証拠が発見され、ついにトルコ政府は、そこを「ノアの箱船国立公園」に指定した。

ノアの箱舟の遺跡

※ただし、未だこの遺跡がノアの箱船であることは、公には認められていない。しかし、実際に十分に証拠が確認されたとしても、世界は公にこの事実を認めないだろうと、私は推測する。なぜなら、方舟の話が歴史的事実だったことを認めてしまうと、生き方を変えなければならない人が多数を占めるからである。

発見された遺跡が箱船であることを裏付ける証拠

遺跡が方舟であることを示す証拠とは、具体的には以下のようなものである。

1. 遺跡は左右対称であり、人工的な建造物であることが伺える。
2. 建造物の材質として木材が用いられている。
3. 遺跡の幅と長さは、聖書に記録されている箱船のサイズ（幅約32㍍×長さ約132㍍）と同じである。
4. 甲板を支えていた柱の後が、等間隔で並んでいる。
5. 遺跡の中からネコ科の動物の毛、石化した動物の糞や鹿の角、などが発見されている。
6. 遺跡の中から、高度な技術で造られた金属部品がたくさん発見されている。

結　論

調査団は、全ての情報を客観的に考察した上で、この遺跡が本物のノアの箱船であると結論づけている。世界はこの証拠を未だ公には認めてはいないが、いづれにしても、ノアの方舟と大洪水の話が歴史的事実であったことについては、他にも多くの証拠が存在している。

ノアの方舟が事実であるとすれば、それは人間の歴史に裁きをもって介入する神の実在を、はっきりと警告するものとなる。ノアの時代の人々は、神の警告を退け、箱船に入ろうとせず、大洪水で滅びる結果となった。

今の時代に、箱船に相当するものとは何だろうか？　聖書はそれについて、「イエス・キリストに対する信仰」であると、明確に語っている。